

現代短歌分類辭典

第百五十八卷

津 端 亨 編 纂

津 端 亨 篇 纂

現代短歌分類辭典

第百五十六卷

現代短歌分類辞典

156

昭和六十一年四月十五日発行 定価二、五〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒111

東京都台東区鳥越一ノ十一ノ八

電話(〇三)八五一―九八六九番

振替 東京 三―九三一―一四

おもふ—ぞ—よ
 おもふぞんぶん
 おもふ—た
 おもふ—だに
 おもふ—たび
 おもふ—だら—う—か
 おもふ—て
 おもふ—てふ
 おもふ—と
 おもふ—どち
 おもふ—と—も—なく
 おもふ—と—なし—に
 おもふ—と—は
 おもふ—とも
 おもふ—と—も—なかり—し
 おもふ—と—も—なき
 おもふ—と—も—なく

三 一 一 七 一 五 一 三 三 二 一 一 一 三五 二 四 三

三 三 三 六 六 六 六 六 五 五 五 五 五 五 五 五 五

おもふ—と—も—なさ
 おもふ—と—も—なく
 おもふ—と—も—なし
 おもふ—な
 おもふ—なかり—き
 おもふ—なかり—し
 おもふ—なかれ
 おもふ—なけ—む—か
 おもふ—なし
 おもふ—など
 おもふ—な—よ
 おもふ—なら—ね—ど
 おもふ—なら—ね—ども
 おもふ—なら—まし
 おもふ—なら—む
 おもふ—なら—ん
 おもふ—なり

七 一 二 一 一 六 三 二 一 一 四 一 一 四 二 二 一

充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充 充

おもふーなりーけり
 おもふーなる
 おもふーなるーべし
 おもふーなるーらし
 おもふーなるーらむ
 おもひーなるーらん
 おもふーなれーども
 おもふーに
 おもふーにーし
 おもふーにーぞ
 おもふーにーは
 おもふーにーも
 おもふーにーや
 おもふーの
 おもふーのーか
 おもふーのみ
 おもふーのみーぞーと

一 三 一 一 三 八 四 八 六 二九 一 二 三 三 三 八 五

一三 一三 一三 一三 一三 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 七 七 七

おもふーのみーなる
 おもふーのみーに
 おもふーのみーにーして
 おもふーのみーにーて
 おもふーは
 おもふーばかり
 おもふーばかりーぞ
 おもふーばかりーなり
 おもふーばかりーなる
 おもふーばかりーに
 おもふーばかりーの
 おもふーばかりーは
 おもふーばかりーを
 おもふーべからし
 おもふーべからーず
 おもふーべからーむ
 おもふーべき

一 一 四 一 一 一 一 一 二 二 一 四 二 七 一 一 四 一

一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三

おもふべき
 おもふーべきーなり
 おもふーべきーや
 おもふーべく
 おもふーべけーむ
 おもふーべし
 おもふーべしーやーは
 おもふーべしーやーも
 おもふーまい
 おもふーまじ
 おもふーまじき
 おもふーまで
 おもふーまでーに
 おもふーまま
 おもふーも
 おもふーも (接続)
 おもふーや

七 六 一 八 一 五 二 一 一 一 五 一 三 一 元 五

一五 二六 二六 一六 一七 二七 一九 一九 一九 二九 二〇 二〇 二三 二三 三五 三三

おもふーやうーに
 おもふーやうーにーと
 おもふーやうーにーは
 おもふーよ
 おもふーより
 おもふーよりーは
 おもふーらく
 おもふーらし
 おもふーらしい
 おもふーらむ
 おもふーらむーか
 おもふーらむーかも
 おもふーらめーども
 おもふーらむ
 おもふーを
 おもふーのみ
 おもへ

一 一 一 一 六 九 一 三 三 四 二 一 九 一 三 一

一七 一七 一七 一六 一六 一五 一五 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四 一四

おもほしーます	一	三八
おもほしめせ	一	三八
おもほす	九	三八
おもほすーや	一	三八
おもほすーらし	一	三七
おもほせ	二	三八
おもほでり	一	三八
おもほてりしーて	一	三八
おもほでりする	一	三八
おもほゆ	九	三八
合 計	四〇五	首

おもふ【動詞】

これやこの夢のなかなる夢にしてわれも舞台のひとつかと思ふ^⑮
 子を葬り口渴きつつ立ちしとき日は遠くして寒きをぞおもふ^①
 子を持てば子の為にさへ後^{のち}かけてわし悪しき名は立てじとぞ思ふ^①
 子を持てる母はしるくも瘦せゆくをあはれと見つつ忍べとぞ思ふ^⑮
 金比羅の社にのぼり遙かなる旅をしぞおもふ靴をぬぎつつ^⑨
 再婚のプラスとぞ思ふ早瀬讓かげなき顔に歌論はづます^⑥
 榊葉にかくる鏡をかがみにて人もこころをみがけとぞ思ふ^①
 酒匂川たぎち流るる水見ればただに跳び入り浴びたくぞおもふ^⑤
 逆鉾の手取りもよけど常陸山をたけび立つを男とぞおもふ^⑥
 盛りなる桜を見れば春のため凱施門の立つかとぞ思ふ^⑮
 酒のみてこよひは君の話ききぬわれにすぐれし君とぞ思ふ^①
 おもふ

吉井勇	鈴木幸輔	與謝野禮巖	窪田空穂	斎藤茂吉	鈴木康文	明治天皇	岡野直七郎	島木赤彦	與謝野晶子	堀内通孝
-----	------	-------	------	------	------	------	-------	------	-------	------

おもふ

寂しかる雪とぞおもふ町かげにさむざむとして凍りたる雪②

三浦義一

寂しければせめて昔のおもひでの華者風流の夢をしぞ思ふ⑬

吉井勇

寂しければ時ならねども^{はたがみ}霹靂神とどろとどろと鳴れよとぞおもふ⑭

吉井勇

佐保姫もかくやとぞ思ふさくら花手にとりもちて君したてれば

三浦守治

静かなる神のみそのの朝ほらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

今上天皇

静かなる庭ぞとおもふたまゆらを冬日に散らふ松の葉のあり④^(新年御歌会始)(秋風抄)

松田常憲

梅雨の今宵の雨に棹さして渡り来まさむ君をしぞ思ふ①

佐佐木信綱

さみだれの晴間をしみ一日だに大和のくにへ行かむとぞ思ふ⑫

斎藤茂吉

さみだれはしふきて降り殺人の心きざさむ人をぞおもふ③

斎藤茂吉

覚めて日はあかあかと杉にのほりをり深き昨夜のねむりをぞ思ふ④

四賀光子

小夜ふけて黒き花瓶の把手^{とりて}より幽かに光さすかとぞ思ふ②

北原白秋

さ夜ふけて胸にし問はば人の世に罪なき人はあらじとぞ思ふ①

佐佐木信綱

三月の七日の光あたたかく春とぞ思ふ山下の道^⑩

松村英一

三十六峯秀をひと方に並めそろひ火を噴きてぬし太古をぞおもふ^⑪

太田水穂

撒灰のなかより萌ゆるみちのくの韭をぞ思ふ母をぞ思ふ^⑬

山本友一

したしくぞ思ふ小鳥よ日毎来て我を慰む羽黒き鳥（トラピスト歌集）

三木羅風

下腹に力を籠めて向ふべき年とぞおもふ雑煮さはに食へ^⑮

窪田空穂

しづかなる今日とぞおもふ雲おりて裾野ばかりなる冬赤城山（新萬葉集八）山口不二花

しづかなる月の光にながむればわれもほとけにならんとぞ思ふ（新萬葉集二）大西祝

寂かなる光とぞおもふ雪つめる山より雲の立ちわたりつつ^①

山口茂吉

しづかなる夕とぞ思ふ枯檜葉に炊ぎの煙触れて消えつつ^①

白水吉次郎

しづかにも白き雲などかたはらに湧くとぞ思ふ君と語れば（新萬葉集八）宮元尚

しづけくしあらむとぞ思ふあけくれを敢て鞭うちわが行かむとす^⑪

吉植庄亮

しどめ咲く春の山辺に桑摘みて心合ひけむ人をしぞ思ふ

伊藤左千夫

おもふ

おもふ

しみじみと土に水やり冥^よ附^みの底^な汝^なが霊^{たま}のへにとどけとぞおもふ②

凍^{しも}つよき冬をぞおもふ高原にあかく枯れ立つ落葉松の苗④

霜おろす頃ぞと思ふ庭笹にさす月かけのさえざえとして③

下つ瀬に築^{やな}の堰見ゆかへりには奇らむとぞ思ふその築の小屋に

寂^{じやく}光^{くわう}土^どありやあらずや知らねどもここに来ぬれば近しとぞ思ふ②④

宿業の民とぞ思ふさりながらこの傲^{がう}岸^{がん}にわれら黙さむ①

棕櫚の葉の軒に鳴るとき眠りたる駱駝の近く立つかとぞ思ふ⑪

鐘^{しょう}楼^{ろう}に新藁^{しん}つみてにぎはしきみ冬とぞ思ふ上^{うへ}之^ののみ寺⑤

じりじりと匍匐^{ふく}しつつも寄り進む兵をぞ思ふその眼力⑧

白木の御物入の構造を眞似^{まね}むとぞ思ふ畏かれども①

白雲のかさなるみねをながめてもかねてぞおもふきみがみゆきを①

白雲の土につく^{はたて}なす果^{はたて}まで山ぞとおもふ起伏だに無し

中 沢 庭 柯

半 田 良 平

松 田 常 憲

川 田 順

吉 井 勇

太 田 青 丘

與 謝 野 寛

鹿 兒 島 壽 藏

北 原 白 秋

上 杉 一 甫

昭 憲 皇 太 后

山 本 友 一

白雲の山にをさまる秋の朝桃を抱き人々の心をぞ思ふ⑧

土屋 文明

知るひとはよしとやなくとも山水の清くところは持たんとぞおもふ⑤

樋口 一葉

白き室に浴みてひとりゐる夜半に九月の月も終るとぞおもふ①

上代 皓三

白々と乾ける夜の道ゆきて春の彼岸のあらしとぞ思ふ④

小暮 政次

城を高く治めし人の此所に来て蒸風呂にゆたかに居りしをぞ思ふ③

土屋 文明

尽十方無碍光如来に帰命して往生したる人をしぞおもふ②

三井 甲之

過ぐる夏たづねし君が部屋より見てありしままなる庭とぞ思ふ
(はつゆきおこし)

鹿児島 やすほ

すでにして冬ふけにける天つ日の光とぞ思ふ照りわたりけり①

白水 吉次郎

砂原に投げいだされしあはれなる男とぞ思ふ女とぞおもふ⑨(春泥集)

興謝野 晶子

ズボンかへてクリスマススに行くさかな屋が楽しく待ちし夜とぞ思ふ②

初井 しづ枝

澄みに澄む山の気ものにしみとほり玉かとぞ思ふ路の小石も⑤

窪田 空穂

性格にまっはりつける業のごとき翳をぞおもふ悔いることなけむ①

大野 誠夫

おもふ

おもふ

踏まり足早なりし君がすがたなつかしみつつ吾はしぞおもふ①

蟬の声ここに聞かねばみちのくの山の高くに来しと思ふ（新萬葉集八）

先生の病みて苦しみ給ひたるところとぞおもふあした目ざめをり②

船室の壁に掛かれる洋傘のふかく傾きゆくをぞおもふ③

底倉のみ湯にたのめるからだなほ敵讎に燃えし心をぞ思ふ④

そこばくの銭をあたへて、還せと思ふ。睦月は、悲しまず居む⑤

その罪は死も猶かろし然れども燃ゆる情を悲しと思ふ（新月）

空翔けて愛しとぞおもふ濃きみどり植林の原に劃る白線

空すこし曇れば赤きほほづきをむしりて君を待たじと思ふ①

大沢寺の門前のへに激ちゐる山川水を浴まむと思ふ

道教寺をきよしと思ふ。虚しくてほこりつもれる、その匂ひさへ⑦

唐もろこし乾し貯へて主食とする籠居ながき冬をぞ思ふ⑥

山口 茂吉

武藤 善友

村田 利明

大村 吳樓

金子 信三郎

釈 迢空

佐佐木 信綱

北原 白秋

三ヶ島 霞子

高田 浪吉

釈 迢空

松村 英一

高村の翁訪ふべくみちのくへ旅せし頃の君をしぞおもふ④

たくなはの長き年月恙なく経し船をぞ思ふ嵐ききつつ④

丈こゆる雁来紅もすがれたり土に散らしし種をぞ思ふ⑤

竹島の雨にを濡れて宿らししをさな帝のみ舟をぞおもふ④

戦ひしときをぞ思ふしらなみのかへりし船をみるにつけても②

ただ時にむさぼり食ひて樂しかりき再びなかることぞとも思ふ⑤

ただひとり世をはかなみて住むときはこも鬼界が島かとぞ思ふ⑩

立ちなほる空ぞとおもふ一時雨こぼして今朝のあけぼのの雲⑤

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも

田のくさに心啖られてあけくれし去年をぞ思ふ日々の清けく⑩
(新年御歌会始)(新萬葉集別)

魂合へる家来の中に座を占めてゆたかに在りけむ君をしぞ思ふ③

たまぐしにかかるなみだの露ながら手回けてもなほゆめかとぞおもふ①

おもふ

吉野秀雄	矢沢孝子	窪田章一郎	中村憲吉	明治天皇	土屋文明	吉井勇	太田水穂	今上天皇	吉植庄亮	吉田正俊	昭憲皇太后
------	------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	------	-------